

## 東京国税局管内納税貯蓄組合連合会 会長賞

### 税金の使い方と動物愛護

柏市立逆井中学校 第三学年 東條 鉄平

私の家には2匹の猫がいる。この猫達は五年前、自治体主催の譲渡会で我が家が保護した猫達だ。今ではすっかり家に馴染んでいる猫達も、産まれた当初は身寄りのない野良猫だったのだ。そんな猫達を救ったのは、他でもない税金という存在だった。

猫達が産まれた場所はとある民家の軒下だった。野良猫が産んだ猫だから一旦その家の人に保護されたが、すぐに譲渡が希望された。その後猫達は自治体に保護され、譲渡希望者を待つことになった。もちろん猫を世話するには施設、エサ、職員等が必要だ。それらは全て税金によってまかなわれていたのである。猫達が自治体に譲渡されてから我が家に迎え入れるまでの間、この猫達の命は税金という国民一人一人の力が守り抜いたのだ。我が家の猫達はこのように、税金によって救われ今も平和に暮らしている。

しかし、世の中には税金によって殺されてしまう動物達もいるのだ。殺処分という言葉聞いたことがあるだろうか。動物愛護センターで手に負えなかったり、譲渡先が見つからなかったりする犬や猫が毎年一定数は人の手、税金によって殺されてしまうのだ。確かにやむを得ない事情があるのかもしれないが、未だに倫理的な問題が残っている。私はこれを間違った税金の使い方だとは思わないが、もっと違うやり方があると思っている。

例えば、私が住む柏市では地域猫活動に対して助成金が出ている。地域猫活動とは、地域の人々が協力して猫の世話をに行い去勢をすることによって、その地域から飼い主のいない猫をなくすという活動である。去勢をすることによってそれ以上身寄りのない野良猫が増えることを防げれば、結果的に殺処分をする必要がなくなるのではないだろうか。確かに地域の人々に負担がかかったり手続きをする必要があるが、ただ税金を殺処分することに使うよりこのような活動や、政府・自治体とは別に動物愛護の活動をしているNPO法人などに助成金を出すほうが、日本の未来はより明るくなるのではないだろうか。

私はこの作文を通して動物愛護と税金の使われ方に着目し、税金に絶対的に正しい使われ方はないのではないかと考えるようになった。我が家の猫を助けたのも税金だし、多くの犬や猫を殺処分したのも税金だ。ただ、殺処分をすることにも理由があり、代替案にも問題はあるのだ。だから、大切なのは絶対的に正しい税金の使い方を考えることではなく、その時々でよりベターな使い方を政府だけでなく国民一人一人も模索していくことではないかと私は考える。